『紫仮面の騎士令嬢』※本文一部抜粋
（連載中：https://ncode.syosetu.com/n5140me/）

青白い月が空高く昇る夜。
屋根の上で月を背負った人影が、暗い路地裏を走り抜ける二匹の鼠を見下ろしていた。
クロークを纏い、深く被ったフードに隠されたその表情は伺うことができない。だが、フードに隠されたその目は、路地裏の鼠――もとい男達の姿を捕らえていた。
寝静まった街に光は無く、その路地裏を照らすのは空から注がれる青白い月明かりのみ。
その月明かりを頼りに、二人の男は辺りを警戒しながら路地裏を進んでいく。
そんな彼らの様子を一通り眺めると、人影はクロークを靡かせ、屋根から空中へと飛び込んだ。
屋根からまた少し低い屋根へ、その屋根から出窓へと飛び移り、月明かりが照らす路地裏へ身軽に降り立つと、男達の前へその姿を現した。
「ッ!?　クソッ！　もう追って来やがったのか……！　なんなんだテメェは！」
前を走っていた男が驚いて咄嗟に足を止め、現れたクロークの人影に向かって乱暴な言葉を吐く。
次の瞬間、クロークの人影は男と瞬時に距離を詰め体を旋回させると、男の頭へ勢いよく蹴りを入れた。
「がぁッ!!」
頭を揺らして声を上げた男の体は、蹴られた勢いのまま壁へ打ち付けられると、反動で地面へと崩れ落ちた。
その様子を見ていたもう一方の男は、何かに気づいたように目を見開く。
仲間が蹴り飛ばされるその瞬間、人影の深く被ったフードが数センチふわりと浮かび、今まで隠されていた顔に『紫色の仮面』が着けられていたのを、男は見逃さなかった。
「テメェ……！　【紫】かッ!!」
そう叫んだ男は、懐から短剣を抜き剣先を人影へと向けた。
【紫】と呼ばれたその人影は、頷くことも答えることもせずに、ただ男を仮面越しにジッと見据えると、ニヤリと口角を上げて見せる。
男は歯を食いしばり、短剣を握る手に力を込めると、駆け出したと同時にその短剣を振り被った。
「そこをどけぇぇぇぇ!!」
その瞬間、【紫】は瞬時に姿勢を低くし懐から剣を引き抜く。と同時に、男の握った短剣を弾き飛ばした。
金属と金属のぶつかった甲高い音が反響する。
手に感じた痛みと共に短剣が弾かれたことを理解し、男は目を見開いた。
そして【紫】は自身の剣を手の中でくるりと回すと、柄先を男の鳩尾へ力いっぱい打ち込んだ。
「ぅぐッ……!!」
男は自身の鳩尾を抑えながら膝を付くと、そのまま力なく地面へ倒れ込む。
白目をむいて倒れる男を確認し、【紫】は剣を鞘へ収めると息を１つ吐いた。
「お～い……！」
再び静けさに包まれたと思った路地裏に聞き覚えのある声が響き、【紫】は振り向く。
クロークをはためかせながら駆け寄ってきた、黄褐色の髪に鮮やかな橙色の瞳を持った男――フィリオは、倒れ込む男達を一瞥し「ですよね」と言わんばかりに小さく笑いを零すと、【紫】へ顔を向けた。
「相変わらず、きみの腕前には恐れ入るよ――ルナリア」
そう呼ばれた『彼女』が振り返り、深く被ったフードを脱ぐと、１つに束ねた長い艶やかな黒髪がサラリと流れる。そして、顔の半分を隠していた紫色の仮面がゆっくりと外され、その美しいアメジストの瞳が露わになった。

彼女の名は、ルナリア・レイヴァルト。

ユーヴェル王国の騎士団を総括する一族に産まれ、騎士団長を父に持つ公爵令嬢だ。

⚜　⚜　⚜

日が沈み、空に満遍なく広がった夜の帳に星が散りばめられた頃。
二人っきりの夕食会が終わり、ルナリアはエスコートしてくれるリオルの腕に手を添えながら、共にヴェルナール邸の扉を潜り階段を降りて行く。
「今日はどうだった？」
「とても楽しかったです。ですが、やはり私が遅れなければ、もっと長く楽しめたのにという気持ちが強くて……本当に、今日は遅れてしまって申し訳ありませんでした」
「そのことならもう謝らなくていい。それに、君が望むなら、また近々夕食をしよう。だから落ち込むな」
「本当ですか……？」
「あぁ。次に一緒に出かける時にでも、予定を立てようか」
「リオル様……」
まるで花が咲くように嬉しそうな笑みを綻ばせたルナリアはその場で立ち止まると、リオルへ寄り添うように優しく抱きついた。
「嬉しい……ありがとうございます」
リオルの胸元へ、甘えるように頭を預けながら、ルナリアは幸せそうな甘い声で呟いた。
自身の胸元から聞こえてきたその声に、リオルはまるで心が溶けてしまうかのような感覚に囚われ、愛おしさと照れから頬や耳がほんのりと赤く染まっていく。
堪らなくなって笑いを零すと、リオルはルナリアを優しく抱き締め返した。
「……今日はこのまま、君をずっと抱き締めていたくなる……」
「ふふっ、私もです。でも、今日はここまで、ですね」
背中に回された腕の力が、名残惜しそうに強くなるのを感じながらも、ルナリアはリオルの顔を覗き込んだ。
「もう……リオル様、そんな顔をしないで下さい。私も、もっと離れがたくなってしまいます……」
目を蕩かせながら、切なげに眉を下げるリオルの頬に手を添え、ルナリアはまるで囁くような優しい声でそう告げる。
リオルはルナリアの言葉に小さく笑いを零すと、頬に触れる彼女の手に自身の手を重ねた。
「……そうだな、すまない。離れがたいのは、俺だけじゃないか……」
その言葉に、ルナリアは頷くように微笑んだ。
リオルはそんなルナリアへ微笑み返すと、スッと背筋を伸ばす。そして優しく握った彼女の手を引き、優雅にエスコートしながら再び共に歩き出した。
階段を降り切った２人が馬車の前までやってくると、ルナリアは振り返り、リオルへと向き直る。
「それでは、名残惜しいですが、本日はこれで」
「あぁ、それじゃあ――」
リオルはルナリアの手をとったまま身を屈めると、その手の甲にキスを落とした。
「おやすみ、ルナリア」
「ふふっ、はい……おやすみなさい、リオル様」
ルナリアはリオルへ美しいカーテシーをすると、従者の手を借りながら馬車へと乗り込んだ。
こちらを見届けようとしてくれているリオルへ窓から手を振ると、馬車が走り出し、ルナリアは彼の姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

⚜　⚜　⚜

「ッ！　危ないッ!!」
リオルは咄嗟に駆け出し、勢いのままに護衛を突き飛ばしその場に膝を付く。
顔を上げたリオルの視界に映ったのは、振り上げられた剣が、自身へ向かって降ってくる光景だった。
「リオル様――ッ!!」
自身の名を呼ぶ護衛の声を最後に聞きながら、リオルは反射的に目を閉じ、視界は暗転する。

そして、剣のぶつかり合う甲高い音が、頭を貫くように響いた――。

どれだけ待っても、痛みも衝撃も襲ってはこない。
未だ尾を引くように、頭の中で余韻を残して響く甲高い音と、自身の体を支える誰かの腕の感覚。
リオルは恐る恐る目を開き、ゆっくりと顔を上げる。
顔を上げたリオルの視界に映ったのは、『紫色の仮面』を着けた人物の姿だった。
「むっ……【紫】!!」
リオルへ振り下ろした剣の先に突然現れた【紫】の姿に、目の前の男は咄嗟に後ずさる。
「なんで、テメェがここにッ……!!」
仮面の下に隠されたアメジストの瞳は、動揺する目の前の男を静かに見据えていた。
だがよく見ると、その紫色の仮面には小さなヒビが入っている。
左手でリオルを支え、右手に剣が握られているのを見る限り、恐らくリオルを庇う際に男の剣を受けて負ったのだろうと察せられた。
すると次の瞬間、仮面に入っていたその小さなヒビが、音を立てて徐々に深く広がっていく。
そしてついにパキンと音を立てて仮面が割れ、地面に落ちると同時に、深く被られていたフードが肩へと落ち、1つに束ねられた長い黒髪がサラリと目を引くように揺れた。
「なっ……!!」
【紫】のその姿に、あちこちから驚きの声が上がる。
露わとなったその顔を映したリオルの瞳は大きく揺れ、震えた息が零れた。
そして、その震えた口で、呼び慣れた愛しい恋人の名を呼んだ。
「――ルナ、リア……？」
リオルに名を呼ばれた【紫】――もといルナリアは男から目を逸らし、リオルの顔を覗き込むと、優しく微笑みかけた。
「ご無事ですか？　リオル様」
その微笑みも、その声も、間違いなくルナリア本人のもの。瓜二つな別人ではない。
心からの確信に、リオルの瞳はまた大きく揺れた。
「お、女ァッ?!」
「ルナリア様……!!」
突然現れた仮面の戦士に、戦いも忘れて注目していた者達は、露わとなったその正体に驚愕する。
男達は『【紫】が女だった』という事実に。騎士達は『【紫】がルナリアだった』という事実に。
「【紫】……ッ！　テメェ女だったのか！」
男は拳を握り締めながらルナリアを睨みつける。
【紫】は、悪行を働き、その道を生業としている者達から疎まれ、恐れられている存在。もちろん、それは彼らも例外ではなかった。
自分達はこんな女に怯え恐れていたのかと、その目には悔しさが滲んでいる。
非道な道を歩み生きている人間でも、男としてのプライドというものは持ち合わせているらしい。
ルナリアは男に、まるで射抜くかのような鋭い視線を向ける。
リオルを支えていた腕を離し、庇うように彼の前へ立つと軽く剣を振るった。
「リオル様。申し訳ありませんが、今は……何も言わずにそちらでお待ちいただけますか」

リオルはルナリアの後ろ姿を見上げる。今自分の目の前にいるのはルナリアだと頭ではわかっているのに、まるで別人を見ているのではないかと錯覚するほど、その姿は違って見えた。
堂々と強かで、凛とした芯のある佇まい。リオルはそんなルナリアから目が離せなかった。
「ルナリア……」
「大丈夫です。すぐに終わらせます」
アメジストの瞳は爛々と鋭い美しさを宿し、口角がゆるりと上がる。
次の瞬間、ルナリアは勢いよく駆け出し目の前の男へ斬りかかった。

⚜　⚜　⚜

「どんな君でも、愛しているよ」
愛情の込もった温かい声が、ルナリアの胸にじんわりと広がり愛おしさで締め付ける。
幸せそうに潤むルナリアの瞳に引き寄せられるようにリオルが顔を寄せ、ルナリアがゆっくり瞼を閉じると、月明かりに照らされた２つの影が１つになった。
優しく触れる柔らかい感触が唇から離れ、ルナリアが瞼を開くと、ほんの数センチほどしかない距離でこちらを見つめる蒼穹の瞳と視線が絡む。
お互いに幸せそうに微笑み合うと、ルナリアはたまらずリオルを抱き締めた。
突然抱き締められ、リオルは一瞬驚いた様子を見せながらもすぐに嬉しそうな息を零し、ルナリアを優しく抱き締め返す。
背中に回された腕の感覚と伝わってくるぬくもりに、ルナリアは愛しげに微笑み、リオルの肩へ頬を寄せる。
まさか、こうしてリオルへ自身の気持ちを伝えられる日が来るなんて、ルナリアは思っていなかった。
お互いに背中を預け合い、護り合える存在。今まで『自分の手で彼を護りたい』という本心を隠してきたルナリアにとって、これがどれほど嬉しいことか、その気持ちは計り知れない。
もう何も隠すことはしない。大切な人を自分の手で護るために、ルナリアはこれからも剣を振り続ける。
ルナリアは腕の中のリオルを更に強く抱き締めると、それに答えるかのようにルナリアの背に回されたリオルの腕にも力が籠められ、彼女を抱き締め返した。
「……なぁ……ルナリア」
「はい、どうされましたか？」
「今日は……朝まで、君とずっと一緒にいたい……」
その言葉に、ルナリアは小さく息を呑む。胸が高鳴り、言葉では言い表せない嬉しさと愛しさが湧き出てくる。
「だめか……？」
ルナリアの腕の中にいたリオルが体を起こし、彼女の顔を覗き込む。けれどルナリアは、そんなリオルの顔を見つめていることができず、視線を逸らし瞳を俯かせた。
徐々に体温が上がり、頬が火照ってきているのがわかる。
そしてリオルからの視線を感じながら、ルナリアは潤んだ瞳を俯かせたまま、けれどしっかりと頷いた。
「……私も……一緒にいたい……」
その返事に色気を纏った目で微笑んだリオルは、立ち上がると同時にルナリアを抱き上げる。
ルナリアは突然抱き上げられたことに驚きながらも、リオルの首元に抱きつき、顔を埋めた。
「……俺の部屋に行こう」
耳元で囁かれた熱っぽい声に背筋がぞくりと震え、ルナリアは返事をする代わりに、更に強くリオルへと抱きついた。
もう既にリオルの腕に抱かれているというのに、もっと彼に触れたい。愛されたいという気持ちが止めどなく湧き上がってくる。
今日は、なんだかいつもと違う。いつも以上に、泣きそうになるほどに、ルナリアはリオルへ

の愛しさに全身を支配されていた。
　それは、胸が切なく痛むほどの愛しさ。けれどその痛みさえも、強い幸福感を感じさせ、ルナリアはたまらずリオルの首元に擦り寄る。
　そんなルナリアをまるで姫君のように抱き上げたまま、リオルは自分の足音だけが響く廊下を進んでいく。
　愛しい恋人の体温を感じながら、これから先に待ち受ける蕩けてしまうような時間に想いを馳せ、ルナリアはゆっくりと目を閉じた。